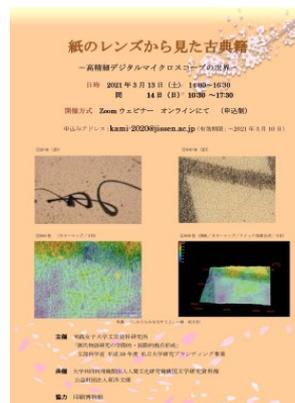


私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	131023	学校法人名	実践女子学園		
大学名	実践女子大学				
事業名	源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成				
申請タイプ	タイプB	支援期間	3年	収容定員	3728人
参画組織	文芸資料研究所、文学部、生活科学部				
事業概要	<p>源氏物語研究の伝統を有する本学が国際的な拠点を形成し、文理融合による独自の学際的手法によって研究を実施する。本事業により源氏物語研究の新たな展開と、日本文化の理解促進という成果が得られる。グローバル化する社会で日本文化の更なる発信が課題とされる中、本事業の成果の活用によって源氏物語を源流とする日本文化の深い教養と発信力を備えた人材を輩出し、世界と地域に貢献する教育研究機関としての地位を確立する。</p>				
事業目的	<p>源氏物語は、世界最古の女流文学・長編小説のひとつであり、日本の文学・文化・社会に大きな影響を与え続けている。海外でも多くの翻訳が流通する中で、国際的にも高い評価を受けており、近年の日本文化に対する関心の高まりの中、更なる注目を集めている。本事業は、源氏物語研究について創立以来の伝統と蓄積を有する本学において、国内外の研究機関・研究者との連携のもとで学際的・国際的な研究の実施と拠点形成を行い、その成果発信をもとに本学のブランディングを行うものである。</p> <p>【外部環境、社会情勢と研究テーマとの関連】 近年、日本文化への国際的な関心が高まっており、日本政府観光局の統計によれば2016年までの10年間で訪日外国人は約1670万人増加し、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催も控え、今後もその数は増加し続けることが予想される。また、インターネットの発展によりSNS等が普及し、個人が国境を越えて情報収集・発信を行うことも容易になっている。このように海外とのコミュニケーションの機会が増加する等、グローバル化が進む社会情勢において、日本文化について日本人自身がその価値を十分に認識した上で、国内外へのより積極的な発信を行う必要性が唱えられている（「平成26年度 文部科学白書」等）。</p> <p>源氏物語は最古の女流文学・長編小説のひとつであり、日本の古典文学作品の最高峰とされ、現在に至るまで詩歌、随筆、戯曲をはじめとした日本文学の様々な分野に対して影響を与え続けている。それだけではなく、源氏物語をモチーフとした絵画、服飾、工芸品等も数多く製作されており、源氏物語は日本文化の源流をなすものとしても位置づけることができる。上述のように日本文化発信の必要性がある中、日本文化の象徴ともいえる源氏物語の研究を行うことは大きな意義を有する。そして、源氏物語研究を深めるためには、文学的視点だけではなく、文化・社会的側面等、様々な側面を考慮した学際的な研究拠点の形成が求められる。</p> <p>さらに源氏物語は、国際的にも高い評価を受けている。現在は33の言語に翻訳され、流通するとともに、2008年の源氏物語千年紀で国際的な興味関心を広く集めたことを受け、海外でも源氏物語研究が盛んになりつつある。こうした環境において、様々な国の研究機関・研究者との連携のもとで国際的な研究拠点を形成し、継続的に事業を実施することは、源氏物語研究の高度化にもつながるものである。</p> <p>【本学に係る現状と研究テーマとの関連】 本学は、1899年の学園創立以来、源氏物語研究に取り組んできた。文学的研究においては、本学の創立者である下田歌子とその講義で評価を得たほか、戦後も山岸徳平、阿部秋生、野村精一らが多くの研究成果を発表し、学術界をリードしてきた。さらに、本学は源氏物語に関する資料を豊富に所蔵しており、中でも黒川文庫、山岸徳平文庫、常盤松文庫等は世評の高い特色あるコレクションである。加えて、将来を見据え、これまで文献研究の中心であった室町期の資料だけでなく、鎌倉期の資料も他の研究機関に先駆けて収集しており、源氏物語関連の古写本や古筆切等の所蔵数は世界でもトップクラスである。</p> <p>これらの研究蓄積と豊富な資料を基盤として、近年、本学は全学的に推進すべき事業として源氏物語研究を位置付け、推進している。同時に、国内外の研究機関・研究者との連携のもと、附置研究所である文芸資料研究所を中心とした研究拠点形成に取り組んでいる。特に有職故実、装束、礼法、民俗芸能、美術等の様々な分野の専門家を研究員とすることで、源氏物語が日本文化に与えた多様な影響を分析し、源氏物語に描かれた時代・社会に関する知見を得るための体制を整えている。これら文化的・社会的側面に関する源氏物語研究の成果を蓄積するとともに、「異文明との対話の新世紀 実践「源氏物語」研究フォーラム」(2001年)、「源氏物語千年紀記念講演会」(2008年)、「宮廷の華 源氏物語」(2014年)、「公開講座 源氏物語のたのしみかた」(2017年)といった本学主催の講演会等を通じ、社会に対して積極的に発信している。</p> <p>【源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成を本事業のテーマとして選択した理由】 本学は創立以来約120年にわたり源氏物語研究に取り組み、研究成果の蓄積と社会への発信を行ってきた伝統に加え、文芸資料研究所を中心とした全学的な研究体制や学外とのネットワークを構築し、学際的・国際的な研究体制の整備も進めている。また、教育機関としても源氏物語に関連する共通教育科目・専門科目も多数開講されており、教育面における本学の特色となっている。グローバル化する社会情勢において、日本文化を深く理解し、わかりやすく説明できる人材を育成することが求められる中、源氏物語に関する研究成果を通じて、日本文化の特徴を理解する人材の育成により、本事業はそのニーズに応えることとなる。</p> <p>以上のように、源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成を本学が実施する理由は十分であり、本事業のテーマとして選択した。</p>				

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	131023	学校法人名	実践女子学園
大学名	実践女子大学		
事業名	源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成		
事業成果	<p>本事業は、源氏物語研究について創立以来の伝統と蓄積を有する本学が、国内外の研究機関・研究者との連携のもとで学際的・国際的な研究の実施と拠点形成を行い、その成果発信をもとに本学のブランディングを行うことを目的としてスタートした。</p> <p>学長のリーダーシップの下、ブランディング事業推進委員会を設置し、全学的な事業実施体制を整備した。事業計画を3つの研究グループによって推進し、以下の成果を上げた。</p> <p>① 古典籍研究グループ</p> <p>源氏物語の古典籍について、文理融合型の研究を実施した。これまでの古典籍研究の年代推定は、古典籍に書かれたテキスト内容を読み、目視で書誌を検討することで、その古典籍が書かれた年代等を推定する手法が中心であった。本事業では高精細デジタルマイクロスコープ(VHX-7000)を用いて、古典籍に使用された紙の観察を行うことで、古典籍に含まれる繊維や填料を分析し、科学的な根拠に基づく年代推定手法の確立を目指した。この紙質の観察による成果は学問のイノベーションともいべきものであり、従来の書誌学、博物館学を一変させる可能性を秘めた技術である。</p> <p>これらの研究成果を公表するため、2019年度および2020年度に以下の学術シンポジウムを実施した。</p> <p>・「源氏物語、伝統と未来」(2019年12月実施)</p> <p>これまで実践女子大学が培ってきた源氏物語研究の伝統に加え、学際的な視点を取り入れた源氏物語研究の未来について、各分野の専門家、海外研究者などが講演。同時に、展覧会「源氏物語の世界－実践女子大学所蔵貴重古典籍展－」を開催し、新たに収集した資料である古筆手鑑「筆陣」をはじめ、本学の貴重資料の展示を行った。</p> <p>シンポジウムの内容は、文芸資料研究所の「年報」第39号(2020年3月)において、横井孝「源氏物語、古きがなかに新しきあり」「源氏物語」古筆切の料紙観察」他5本の論文を成果として発表している。</p> <p>・「紙のレンズから見た古典籍」(2021年3月実施)</p> <p>古典籍研究によって得られた成果の一部として、美しい写本を製作するには打紙加工、また美しく印刷するためには充填剤、平滑剤として米粉の混入が必要ながことが判明した。これらは従来の文学研究では見過ごされてきた知見である。特に「源氏物語」写本研究には打紙の研究が不可欠であり、それらの成果公表のためのシンポジウムであった。このシンポジウムはコロナ禍の中で、積極的な広報が行えなかったにもかかわらず、150名の参加申し込みがあり、オンライン開催という特性から参加者の国籍も日本のみならず、ノルウェー、イギリス、オランダ、アメリカ、韓国、台湾と多岐にわたり、世界的な関心の高さがうかがえた。</p> <p>シンポジウムの内容は精選し、2021年12月に刊行予定の『書物学』(勉誠出版)において、特集「打紙と米粉」として公表される予定である。また、さらに詳細な内容を加えたうえで、本格的な専門書『紙のレンズから見た古典籍』としての出版を予定している。</p>		



事業成果

②装束復元グループ

本事業の柱の1つとして「源氏物語」の世界の可視化を目指している。そこで、平安期の宮廷装束(女房装束)、具体的には「源氏物語」「若菜下」に登場する明石の君の装束の復元を実施している。

源氏物語はその成立から1000年以上が経つが、そこに登場する装束に関しては、ほとんど研究がなされていない。また、平安期の女房装束は現代に残っていないため、「源氏物語」の他、同時代の参考資料として「宇津保物語」「落窪物語」「枕草子」などの平安期の文学作品、「源氏物語絵巻」等の絵巻類、「御堂閔白記」「小右記」などの記録、「雅亮装束抄」などの初期の装束書等を検証し、さらには鎌倉・室町期に御神宝として奉納され、現存している装束も参考にしながら復元に取り組んでいる。

復元に当たって全体の監修は、鎌倉期から朝廷や将軍家の装束を担当してきた衣紋道高倉流の二十六世宗家高倉永佳氏に依頼し、製作は高度な織物の技術を有し、現代装束を宮内庁等に納入している株式会社井筒に依頼した。また、染色については平安期の草木染め復元の研究の蓄積を有する吉岡更紗氏に依頼した。

平安期の女房装束製作に当たっては、当時の装束が日常着であったことから、現在のように重量のあるものとは考えづらいため、使用する糸から選定し、当時に近い細い生糸を使用することにするなど、単なる装束復元の域を超え、装束そのものに関する研究を大きく前進させることとなった。その具体的な成果としては、「細長」は唐衣に準ずる正装であり、源氏物語には登場するが、それ以降の作品ではほとんど登場しないこと、「五衣」と呼ばれる装束は鎌倉期以降の呼称であり、源氏物語が書かれた紫式部の時代は5枚以上が基準であること(今回の復元では「重ね桂」6枚とした)、またその6枚は同寸であったこと、等が挙げられる。

以上のことから、平安期女房装束は形状や様式等が現代の「十二単」とは大きく異なることが分かった。

また、本事業では、復元する平安装束の対比として、現代の皇室の使用する装束に近いものを製作した。現代において「十二単」と言われる装束は、女帝の即位や江戸期以降の儀礼上の必要性や、明治以降の近代国家にふさわしい装束として構想され、成立したものであることが今回の復元を通じた研究で得られた知見である。

【成果論文】

高倉永佳・佐藤悟・横井孝「平安期女房装束の復元にむけて(一)」(『実践国文学』99号、2021年3月)

高倉・佐藤・横井「同(二)」(『実践国文学』100号、2021年10月)掲載予定



事業成果

③成果発信グループ

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初計画よりイベントの実施回数は減ったが、研究成果および源氏物語の世界の国内外への発信として、2つの大きな成果を残すことができた。

・古典の日10周年記念フォーラムin東京2019(2019年11月19日)

2019年に古典の日推進委員会と本学で締結した連携協定に基づき実施。「五感でたのしむ『源氏物語』」と題し、雅楽師の東儀秀樹氏、香の老舗松栄堂主人の畑正高氏、植物染で有名な染司よしおかの吉岡更紗氏による講演会には、学内外から700人以上が参加し、源氏物語の世界を音、香り、色で感じられる講演会となった。

・パリ日本文化会館での公演・展示(2020年2月4日～15日)

源氏物語は、世界で30以上の言語に翻訳されているが、中でもフランスは、研究者により早くから仏語訳の源氏物語が出版され、源氏物語を題材とした日仏の比較文化研究もおこなわれている。そのフランスのパリ日本文化会館において、本学の源氏物語研究の成果や収集してきた貴重資料の紹介、日本の春夏秋冬をテーマにした装束や香道具などの展示を実施した。展示には10日間で4,000人以上の来場者があった。さらに展示期間中に香席や装束の着装の実演を交えた公演を実施し、130人のホールではあったが満席となり、フランスにおける源氏物語への関心の高さを実感することができた。イベントを通じて源氏物語研究拠点としての本学のブランド力をフランスでアピールするとともに、源氏物語が描く世界を「現代も生き続ける日本文化」として表現することができた。



今後の事業成果の活用・展開

◎文理融合研究(新コーディロジー)の確立

紙質研究をはじめとする文理融合研究をさらに進展させ、顕微鏡による非破壊の年代推定手法の鍵となる「紙のものさし」の策定や紙の繊維中に含まれるカルシウム・米粉等の検出のための技術の確立を目指す。さらに紙にとどまらず繊維全般にも研究対象を広げる予定である。

さらに奈良先端科学技術大学院大学や国文学研究資料館等、他の研究機関との共同研究を実施し、「源氏物語」を研究する大学としてのブランドを確立していきたい。

◎「源氏物語」の世界の可視化

装束復元は2021年度末の完了を予定している。その工程については随時webサイトで発信し、書籍の刊行も予定している。また、復元装束とそれに対比する現代装束は国内外において、展示および着装の実演等を行う予定である。

◎教育への還元

2020年度末時点では、一部の卒業研究でVHX-7000を使用した古典籍の調査・観察が行われており、参加している学生も強い刺激を受けている。装束の復元考証に関しても、研究グループの実証実験に学生が協力しており、これも学生に対して大きな関心を喚起している。今後は、本事業の成果をカリキュラムに組み込み、文理融合型の源氏物語研究と装束研究を取り入れた「源氏物語」に関する新しい授業科目を確立していきたい。

本事業によって得た研究成果を広く発信するだけでなく、「源氏物語」周辺を含めた継続的な研究を行うことで、源氏物語研究の学際的・国際的拠点となる大学、すなわち「源氏物語と言えば実践女子大学」というブランディングをさらに推進していく。